優秀賞

日常に散りばめられた小さな幸せ

北海道教育大学釧路校３年（北海道）
鳴海 あゆ子

私は、茶道を大学の部活動で始めました。まだ２年半しか経っていません。２年と聞くと長いと思われますが、正直、技術は本当に初心者の域を出ないことを自覚しています。私が「しか」と表現したい気持ちがあるのは、茶道に対して心が向いていなかった時期があったからです。コロナの影響や大学の講義を優先して、なかなかお稽古に時間が割けない時期がありました。しかし、今年度、先生や先輩方から、副部長に選んでいただきました。その責任や期待には応えたいという一心で、この半年間、稽古に積極的に取り組み、本を買って自宅でも学習しました。つまり、最近になってやっと、茶道に真剣に取り組み始めた身であることをここに告白します。しかし、今は茶道にとても魅力を感じ、大人になってもずっと、生涯の趣味にしたいとまで思っています。私が、なぜこんなに茶道に惹かれているのか、それを自分でも整理するためにこの文章を綴ります。

茶道には、生活に散りばめられた小さな幸せに気付き、それを味わう心を磨く力があると思っています。柄杓を蓋置に置く、あの「コツ」という音。お点前の最初に、少し緊張感が走り、背筋が伸ばされる様な気がします。そして、柄杓から釜に落ちる湯の音。ただの小さな音のはずなのに、不思議と心が澄まされる心地がします。さらに、茶を点てる際の、順々に変わる三層の音。日々の喧騒から離れた空間に響くこの音は、心地いいリズムで響いて心をゆっくりとほぐしてくれます。茶道の魅力に気付けた私には「音」、というものだけを切り取ってもこんなにも心が動き、満たされた気持ちになることができます。この体験は、茶道を始める前までは私の人生において無かった視点でした。これらの「音」は、茶道、という特別な文化空間の中だからこそ、感じられるものでしょう。ですが、本当にそれだけでしょうか。私は、茶道を始めてから、生活に溢れるたくさんの素晴らしい「音」に気付き、それを大切にできるようになりました。夏の夜、眠りにつこうと寝床に入った後。以前なら、１日の出来事を色々思い浮かべ寝るだけ。こんな風に文章にしようという気さえ起きない、ただの日常の作業に過ぎませんでした。しかし、茶道の魅力を知った私にとってそれは、静寂に包まれていて、暗くて、音を楽しむ絶好の空間です。様々に入り混じる虫の声、窓を開けているせいか聞こえるどこかのおじさんのくしゃみの音。それらに、趣を感じたり、なぜか少し寂しい気持ちになってみたり、そして、クスっと笑ったり。私は、そんな風に日常に散りばめられた小さなことに、心を躍らせることができるようになった自分が、照れくさいですが、少し愛しい様に思います。私が過ごす日常は何も変わっていないはずなのに、心の温度がじんわりと温かくなった気がするのです。

そして、私は茶道のお稽古の後はなぜかしばらくお腹が空きません。それは、心で感じた美味しさに満たされているからでしょう。お菓子を出していただくと、まずは、そのお菓子をゆっくりと目で楽しみます。季節ごとに変わるその形や色を鑑賞して、そのお菓子について先生や仲間と談笑したりします。そして、懐紙を通して伝わるしっかりとした重みを感じつつ菓子切

を入れます。そして上品なそのお味に込められた意味や思いに心を馳せつついただきます。その後にいただくお茶のお味。これは、茶道を始めた最初の頃と同じく、苦くて普段はあまり出会うことのないお味という印象です。しかしこれは、なんとも表しきれない、亭主の深いおもてなしの味がします。これまで五感全体で包み込まれる様に感じていた、亭主によるおもてなしの心の集大成を一心に受け取り、いただくのです。お稽古が終わった頃には、舌に残る余韻を感じつつ、亭主のおもてなしによって心でいっぱいに満たされるのです。普段の食事量と比較すると、小さなお菓子そしてお茶であるはずなのに、あの満腹感。これは、心が満たされた証であるとわかりました。茶道を始めてから私は、より食を積極的に楽しみ、感じたいと思う様になりました。普段の食卓でも、このお料理はどこの国のものなのだろう、このお野菜は何だろう、と味覚だけで楽しむことをしなくなりました。すると、日常と変わらない食事のはずなのに、一緒に食べる人との会話も増えて、一層楽しい営みに変わりました。

最後になりますが、茶道は私たちが生きている世界の素晴らしさに気付ける、とても尊い文化だと思います。日常生活では気にも留めず流れていく、音や味。このような些細な幸せをきちんと受け取れる心を持てたことは、私の一生の財産です。